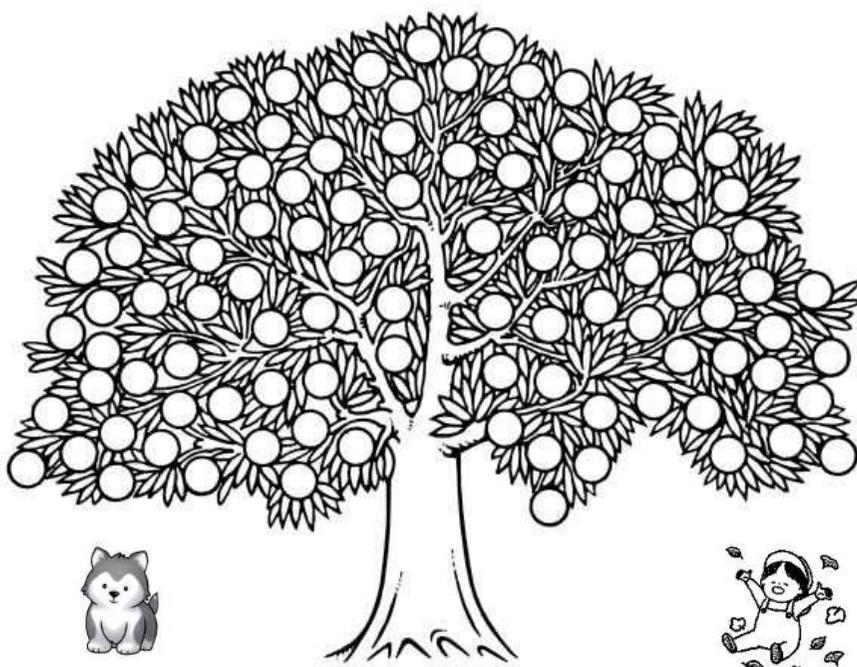


図書館友の会会員による

おすすめの

本

2023 年度



さいたま市図書館友の会東浦和支部

## も く じ

- |                       |                |    |
|-----------------------|----------------|----|
| □ はじめに                | 友の会東浦和支部長 外山太郎 | 3  |
| □ 図書館からのご挨拶           | 東浦和図書館長 望月和幸   | 3  |
| □ バール、コーヒー、イタリア人      | 島村菜津           | 4  |
| □ ダーウィンのドラゴン          | リンゼイ・カルビン      | 4  |
| □ 20歳の自分に教えたい 地政学のきほん | 池上 彰           | 5  |
| □ ガリバーの息子             | マイケル・モーバーゴ     | 5  |
| □ 司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義  | 福間良明           | 6  |
| □ タベの雲                | 庄野 潤三          | 6  |
| □ 「空也十番勝負（1～10）」      | 佐伯泰英           | 7  |
| □ 蜜蜂と遠雷               | 恩田 陸           | 7  |
| □ 最悪の将軍               | 朝井まかて          | 8  |
| □ 裁判官の爆笑お言葉集          | 長峰超輝           | 8  |
| □ ニコライ遭難              | 吉村 昭           | 9  |
| □ 街とその不確かな壁           | 村上春樹           | 9  |
| □ 香君                  | 上橋菜穂子          | 10 |
| □ 司馬遼太郎全講演            | 司馬遼太郎          | 10 |
| □ 青い月曜日               | 開高 健           | 11 |
| □ なつかしい町並の旅           | 吉田桂二           | 11 |

<input type="checkbox"/>	高瀬庄左衛門御留書	砂原浩太郎	12
<input type="checkbox"/>	古都再見	葉室 麟	12
<input type="checkbox"/>	青 嵐	山本周五郎	13
<input type="checkbox"/>	上野池之端 鱗や繁盛記	西條奈加	13
<input type="checkbox"/>	安西水丸東京ハイキング	安西水丸	14
<input type="checkbox"/>	ときめき昆虫学	メレ山・メレ子	14
<input type="checkbox"/>	小津安二郎	平山周吉	15
<input type="checkbox"/>	伊集院 静の流儀	伊集院静	15
<input type="checkbox"/>	ぼくはあと何回、満月を見るだろう	坂本龍一	16
<input type="checkbox"/>	高峰秀子ベスト・エッセイ	高峰秀子	16
<input type="checkbox"/>	龍神の子どもたち	乾 ルカ	17
<input type="checkbox"/>	銀杏手ならい	西條奈加	17
<input type="checkbox"/>	流人道中記（上・下）	浅田次郎	18
<input type="checkbox"/>	ハンチバック	市川沙央	18
<input type="checkbox"/>	同姓同名	下村 敦史	19
<input type="checkbox"/>	晴天の迷いクジラ	窪 美澄	19
<input type="checkbox"/>	哲学の教科書	中島義道	20
<input type="checkbox"/>	機械仕掛けの太陽	知念実希人	20
<input type="checkbox"/>	映画を早送りで観る人たち	福田豊史	21
<input type="checkbox"/>	かたばみ	木内 昇	21

## はじめに

東浦和図書館では、職員の方々が担当する図書の展示コーナーが設置されています。担当の方が考えたテーマに沿った本を集めて、2～3週間展示するのですが、‘目指せ！健康長寿’ ‘トイレ’ など担当者のセンスも表れて興味を惹きます。‘現役中学生のお薦め本’では、尾間木中生徒が制作したPOPがユニークで、展示期間中に貸し出された本がいくつもあって、多くの反響があったように見受けられました。このように図書館と図書館を利用する人々との間に、自然なつながりが生まれて、地域の図書館というイメージが共有されていくのはすばらしいことです。

昨今チャットGPTなど、優れたアプリが生まれて、インターネットで何でも簡単に知ることができるような意識が広がりつつあります。便利なことはいいけれど、ボタンを押すと答えが出てきてしまうような勉強の仕方が一般的になることには、怖さを感じてしまいます。文章を理解し、調べ方を学習したり、感性を育てたりする力を獲得できるようになるには、何とんでも自分の意志で本を読んで、その中からいろいろな事をつかみ取っていくことが不可欠でしょう。図書館は、そのような危惧をなくしていくために大きな力を発揮できると思います。また私たちボランティアも一緒に努力していけたら大変うれしいことと考えています。

さいたま市図書館友の会

東浦和支部 支部長 外山太郎

## 図書館からのご挨拶

図書館友の会のみなさまには図書館運営にご協力いただき、ありがとうございます。今年度も『図書館友の会会員によるおすすめの本』を発行されますことをお祝い申し上げます。今回は、友の会のみなさまと一緒に、東浦和図書館の職員も何名か書評を書かせていただいております。本好きな友の会会員のみなさまと図書館職員がコラボして、より多彩な内容に仕上がったのではないかと思います。私も書評を期待しており、読んだことにより、新しい本へと導かれることもあり新鮮で楽しみです。昨今、テレビ、ユーチューブ、SNS等、情報が氾濫している中、本を読む時間が減ってきているのではないかと感じています。こうした時代のなか、敢えて、1冊の本をじっくり読むことも良いのではないのでしょうか。忙しい時代にこそ、本を読む時間は一服の清涼剤ともなるかもしれません。そのきっかけにこの冊子がなれば、いいなと思います。図書館は、みなさまの期待に応えるよう努力して参りますのでこれからも東浦和図書館をよろしく願いいたします。

さいたま市立東浦和図書館

館長 望月 和幸



## 『バール、コーヒー、イタリア人』

島村菜津 著  
光文社 2007

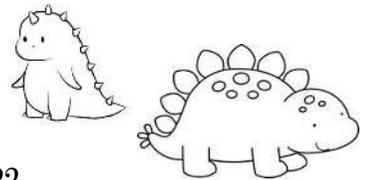
「バール」とは、コーヒーやお酒、軽食などを気軽に楽しめる立食中心のお店ですが、時にケーキ屋やコンビニにも化ける、イタリア人の生活になくてはならない存在です。

マニュアル通りの接客とは無縁のお客さんのとんでもないわがまな注文にも応えてくれるバール。

バールを通じて量より質の豊かさを重視するイタリアの文化、国民性を気軽に知ることができる一冊です。( M. O )

## 『ダーウィンのドラゴン』

リンゼイ・カルビン／著  
千葉茂樹訳 小学館 2022



イギリスからビーグル号という船で世界一周の旅に出たダーウィンと助手の9歳の孤児のシムズ・コビンソン。ガラパゴス諸島での調査活動中に嵐に会い、船から投げ出されたシムズはどうにか生き延びて、ビーグル号に戻ることができた。流れ着いた島で見つけたトカゲの卵らしきもの。大事にイギリスに持ち帰ったシムズはそれをドラゴンの卵と信じて一生懸命世話をする。卵から孵ったトカゲに似た子たちは病気になったり弱ったり精神的なストレスに見舞われたり。一人きりで流れ着いた島での日々、イギリスに帰ってからの日々。思いがけない展開の連続の冒険小説。登場人物や島々はどれも実在のもの、エピソードのみが創作で、著者本人は歴史小説としている。(リブル)

## 『20歳の自分に教えた い 地政学のきほん』

池上 彰／著

SBクリエイティブ（株）2023

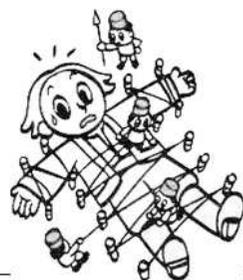
国際情勢がめまぐるしく変化し、日本をとりまく環境が脅かされている昨今、地政学の観点から、いろいろ考えることの重要性を、やさしく、池上さんが教えてくれます。

防衛費の増額を政府は検討しています。私達をもっと日本を取り巻く状況を理解するのに足掛かりになる本なので、ぜひお勧めします。（C.O）

## 『ガリバーの息子』

マイケル・モーバーゴ／著 杉田七重／訳

小学館 2022



アフガニスタン難民のオマール。家族とはぐれて、小さなゴムボートに乗って叔父のいるイギリスを目指すのが、ボートは大波をかぶり、オマールは海へ投げ出された。気が付くと、陸地に寝ていて、周りには大勢の人がいたが、その人たちはオマールの手の指ほどの大きさの小さい人たちだった。そこは300年前にガリバーが辿り着いたリリパット国だった。小さな人たちはオマールをガリバーの息子と思い、歓迎して大切にしてくれた。ガリバーのしたことに感謝してガリバーの言葉を伝える、やさしく偏見を持たない人たち。

ガリバーの物語は子どもの頃読んだきりで、こんなこと書いてあったかな？と、思いがけず読み直す機会も得た。巻頭にあり、この物語を構築する基礎となっている「よそ者だからといって、心ない扱いをしてはならない。人間に変装した天使かもしれないのだから」のジョージ・ホイットマンの言葉が心に残る。（リブル）

## 『 司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義 』

福間良明 / 著

中公新書 2022

昨年、生誕100年にあたる歴史、時代小説の巨匠、司馬遼太郎の人気は今だに高く、特に文庫で読まれているようです。この本の副題にも「大衆教養主義」とありますが、どこからその作品が生まれてきたか、司馬遼太郎の生涯と作品を時代とともに描いた一冊です。 (N 生)



## 『 タベの雲 』

庄野 潤三 / 著

日経新聞社 2023

13の章から成り、エッセイに近いような構成で日々の何気ない暮らしが紹介される。人の暮らしとはこういうものか、幸福とはこういうものか、そういったことを再認識させてくれる。

多摩丘陵の一つである丘の頂上に越してきた5人家族、父・母・長女・長男・次男の、楽しくも興味深い生活が時の流れと共に書かれていく。時代は日本が高度成長期に差し掛かった頃かと思われる。古き良き時代の家族に於ける、ある種ノスタルジックな趣が感じられる。「穏やかでつつましく地味だがある種の充足感があって時間が流れていく……」(長谷川宏)とはこういったものかと。 ( M. K )

## 『空也十番勝負』 (一)声なき蝉 上～(十) 奔れ、空也』全12巻



佐伯泰英 / 著  
文芸春秋 2023

江戸神保町にある直心影流尚武館道場の主坂崎磐音の嫡子空也。16歳の夏、武者修行の旅に出る。まず訪れたのは、そのころ他国者の入国を許さない薩摩。国境での戦いを重ね、半死半生で辿り着き、修行を重ねる。無事薩摩を出ても空也を仇と狙う輩や長崎での外国人との戦いなど、どれも命がけで息をのむ展開。思いがけない出会いもあって思わず笑みもこぼれる。

一卷ごとに空也は心も体も逞しく成長していくが、その姿形は大谷翔平を彷彿とさせるほど、魅力的。(リブル)

## 『蜜蜂と遠雷』



恩田 陸 / 著  
幻冬舎 2016

タイトルを見ると何の話かと思うが、国際コンクールに挑む若手ピアニスト達の友情と成長を描く。

この小説では、コンクールの会場は架空の地方都市となっているが、作者は3年に一度開催される、浜松国際ピアノコンクールを4回取材したとのこと。さまざまな生い立ちの天才達が繰り広げるコンペティション。ピアノの演奏を作者はどのように表現するのか。(秋桜)

## 『最悪の将軍』

朝井まかて／著  
集英社文庫 2019

5代将軍綱吉とくれば「生類憐みの令」。人より犬を大事にして庶民から「犬将軍」と言われ、後世の評判は散々だ。ところが、最近ではこの評価に疑問が出て見直されつつある。

綱吉の治世（1680～1709年）には、大きな事件や災害が実に多かった。1683年日光地震、翌年には大老堀田正俊の刺殺事件。その後は2年続けて江戸の大火。1701年松の廊下の刃傷事件、翌年の赤穂浪士の討ち入り。1703年元禄地震、その後に宝永地震、さらに富士山が噴火。数年後には天然痘と麻疹が流行している。根が真面目だった綱吉は、これらの災厄に立ち向かった。作者は、綱吉の人間性と泰平の世をつくろうとする精一杯の姿を丹念に書いている。（一休さん）

## 『裁判官の爆笑お言葉集』



長峰超輝／著  
幻冬舎新書 2007

判決文とは一般人には理解しがたい無味乾燥なものという認識だったが。これは 個性あふれる肉声を集めたもの。作者は7回司法試験にトライした傍聴マニア。2007年刊なので、その後も是非知りたい。（S）

## 『ニコライ遭難』

吉村 昭／著  
新潮文庫 1996

明治 24 年の「大津事件」の詳細がわかる小説。帝政ロシア最後の皇帝になり、共産革命により命を落としたニコライの皇太子時代の出来事である。日本はロシア皇太子の来朝を官民あげて歓待したが、琵琶湖遊覧に訪れた際に沿道警備についていた巡査がサーベルで切りかかったのである。皇太子は軽いケガをただけですんだが、この事件は未曾有の国難となった。

作者は、ニコライの来日から事件に至り、事後の出来事までこと細かく事実経過をたどり、政府関係者の苦悩、明治天皇の誠実さ、犯人に対する民衆の怒り、犯人津田三蔵と犯人を取り押さえた車夫のその後などをたどる。この未曾有の試練に対して誠意と勇気、熟慮と決断をもってあたった日本人たちを描いている吉村文学の名品の一つである。

(M. S)

## 『街とその不確かな壁』



村上春樹著  
新潮社 2023

6年ぶりの村上春樹の長編小説です。小説は虚を實に書き上げるものですが、主人公が 17 歳の時に愛した 16 歳の少女は虚なのか実なのか、影の無い人間は、針の無い時計は、そして壁に囲まれた街は虚なのか実なのか、村上春樹ワールドは巧みな文章で引き込んでいきます。そんな見事な面白い小説でした。少し分厚い本ですが、読んでみて下さい。

( N 生 )

## 『 香君 』

上橋菜穂子／著

文芸春秋 2022

香りで万象を知る娘アイシャは、人並外れた嗅覚を持つ。すべての臭いを発するものの声を聴いて様々ななぞと向き合い戦っていく。人にとっての利益だけを見てしまえば万象が歪み、巡り巡って人にも害が生じてしまうとか、自分の行動が何につながりどんな結果をもたらすかを判断できる想像力が必要など、今を生きる私たちにとって大切なことも物語を通じて伝えてくれる。

(リブル)

## 『 司馬遼太郎全講演 』

司馬遼太郎／著  
朝日文庫



「竜馬がゆく」を始め名作が多い司馬遼太郎ですが、日本の歴史と地方の人物や文化について小気味よく織り交ぜられ、生で聞けたらさぞ面白かっただろう。史実について奥行きのある人物像を浮かび上がらせるため、司馬さんの知識を触媒にして読者の創造を膨らませる。名作の数々を再読したくなる講演内容が記述されている。読後何か所もメモをした。(J ボンド)

## 『 青い月曜日 』

開高 健 / 著

文春文庫 1974

青い月曜日とは英語のブルーマンデーに由来し、宿酔・二日酔いのことをいうと。

第二次世界大戦末期から戦後までの、著者、少年期から青年期の時代、そういう社会にあって、本人はもとより友人、家族、周りの人々の日常、考えかたが赤裸々に綴られている。戦争が終わりに向かっていく中での悲惨な実情が実に細かく書かれており、戦争とはこういうものかと目をそむけたくなる。戦後もしばらくはそれまでとそう変わりはなく、人間のひととしての底辺の部分が浮かび上がってくる。開高健の自伝だそうで、ここでタイトルが胃の腑に落ちる。 (M. K)



### 「 懐かしい町並みの旅 」

吉田桂二 / 著

新潮文庫 1984

建築家である作者が、小樽、黒石、羽黒手向（はぐろとうげ）・・・と北から南へ全国各地にかろうじて残る古い町並みを訪ね歩いた中から、26ヶ所を選び、それぞれの町の歴史や街並の特徴について、味わいのある文章と3～4枚のスケッチで描いた“古いものへの愛惜の旅”の記録。パラパラめくって、スケッチだけ見ても見応えがあります。

( 秋 桜 )

## 『高瀬庄左衛門御留書』

砂原浩太郎／著  
講談社 2021

情景描写が巧み。自然の季節の移ろいを咲いている花や鳥の鳴き声で表現。自然に小説の情景の中に身を置いて筋の展開を楽しむことができる。大仰な表現ではなく穏やかな表現であるのに、筋の展開にドキドキさせられ引き込まれて、一気に楽しめた。(リブル)



## 『古都再見』

葉村 麟／著  
新潮文庫 2020

古都を観光しようと思われている方には、ぜひこの本を読まれてから行ってきてくださいとおすすめる一冊だ。葉村麟さんは、亡くなる二年前に、見るべきものはやはり見ておきたいと、京都に仕事場を移された。京都に寄せる思いの強さが伝わってくる。

葉村さんの目に留まったところは多岐にわたる。西本願寺、花街、レトロな喫茶店など、68 篇。これらは、通り一遍の紹介でなく、歴史や出来事など関連させながら書かれていて、奥が深い。

これまで京都を訪れた方も、きっと新しい発見や驚きを経験されると思う。京都の町を、改めて再訪したくなる本だと思う。

(ラベンダー)

## 『青嵐』

山本周五郎／著 小学館 2010

山本周五郎の作品は、最近ご無沙汰していたので、久しぶりに読んでみた。夫婦愛、友情、憎しみ、過ちなど、武家ものが7篇納められている。短篇ながら中身が濃い。読後、暖かな気持ちになる。（秋桜）



## 『上野池之端 鱗や繁盛記』

西條奈加／著新  
潮文庫 2016

上野池之端の「鱗や料亭」は食通も通う評判の良い店だったが、先代の主人夫婦が亡くなってからは質が落ちるばかりであった。そんなお店に奉公することになった14歳の「お末」は、お客さんに喜んでもらうことを楽しみに働く健気な娘だが、他の人々はみんなやる気がない。主人夫婦はお店に出ることもなく、たまに出ても奉公人を吐りつけるだけ。板前も、お運びの女たちもいいかげんで怠けてばかり。

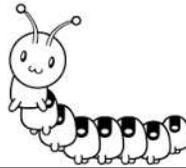
お末はお客さんから注文があった「熱々の蛤鍋」を運ぶときに鍋が親指に当たって火傷をしてしまった。この小説は健気な娘の成長物語であり、先代主人夫婦はどうして亡くなったのか、鱗やはなぜ落ちぶれてしまったのか、謎解きのミステリーでもある。（昼行燈）

## 『 安西水丸 東京ハイキング 』

安西水丸／著 淡交社 2023年

著者安西水丸さんが亡くなって9年余り経ちますが、相変わらぬ人気著書等が出版されています。この本もその一冊ですが、一年東京の街々に割りふり素敵なスケッチと俳句を添えて小粋に出来上がっていて、散歩にも持って歩ける新書版の本です。 (N 生)

## 『 ときめき昆虫学 』



メレ山・メレ子／著  
イースト・プレス 2014

いわゆる“虫屋”でも研究者でもない一介の OL・メレ山メレ子。わたしたちの身近なところにいる 20 の虫について、日本から世界へ飛び出して体当たりで総力取材。チョウ、ハチ、トンボ、ダンゴムシ…。いろいろな面からその虫の素晴らしさ、面白さを引き出して、虫が好きな人じゃなくてもどんどん読める。出てくる人たちもみんな面白くて魅力的です。こんな経験も…。(本文から)

集合時間になって調理室に行くと、優秀な昆虫料理研究会員によって集められたいろんな虫食材が集まっていた。・・・本日のメインディッシュ。羽化のために地上に出てきたセミの幼虫も、ボールいっぱいにごめいていた。参加者たちが驚きあきれている間に、昆虫料理研究会の面々はテキパキと虫を調理していく。セミ幼虫たちの多くは、素揚げされて塩を振られた。おそろおそろ口に入れてみると、なんとなく想像していたものの、まさに「エビのような味」。竹かごなどに入れて出せば、上品なおつまみとして通るだろう。・・・ (かわせみ)

## 『 小津安二郎 』

平山周吉／著  
新潮社 2023



「晩春」「麦秋」「東京物語」と原節子主演の  
〈紀作〉が、小津安二郎監督の戦後の代表作ですが、著者は、こ  
れらの作品を同時期に中国大陸を転戦し戦病死した盟友の山中貞  
雄監督への鎮魂の譜としてとらえた素晴らしい小津監督論です。

(N 生)

## 『 伊集院静の流儀 』

伊集院静／著  
文春文庫 2013

大人って何だ？大人とは、一人できちんと歩き、自分と、自分以外  
の人にちゃんと目を向け、いつでも他人に手を差しのべられる力と愛  
情を持つ人だ。——おろかな拝金主義が、この国をみにくくゆがめ、  
大震災は、かけがえのない日常を粉々にしてしまった。再出発の今こ  
そ、君はほんとうの大人として、立たねばならないのだ。—— 伊集  
院氏の大震災の経験他、人生観が生き方の流儀としてまとめられる。  
とても心を打つエッセイ、対談集です。 (J, ボンド)

## 『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』

坂本龍一著  
新潮社 2023

作年3月28日、癌との闘病のうえ71歳で亡くなった世界的音楽家坂本龍一さんの2009年以降の歩みを綴った最後の自伝です。3年前、余命半年と云われ20時間に及ぶ手術を受け、それからの闘病生活、そして命尽きるまで続ける音楽だけでなく映画、美術、哲学、そして社会に対する真摯な姿には心を打たれます。

(N生)

## 『高峰秀子ベスト・エッセイ』



高峰秀子/著 斎藤明美/編  
ちくま文庫 2022年

映画「浮雲」「二十四の瞳」「名もなく貧しく美しく」などに主演し、日本映画を代表する女優であった高峰秀子さんは、闊達な文章で知られる名文筆家で、多くの名エッセイを残しています。その中から精選され一冊にされたのがこの文庫で、お薦めです。(N生)

## 『 龍神の子どもたち 』



乾 ルカ／著  
祥伝社 2020

山を切り開きゴルフ場やニュータウンをつくる開発のなかで、その地に代々語り継がれる決まり事を大切にしている人たちと、その地を開発し便利な街にしようとして新しく住み始める人たち。昔からの山の集落とニュータウンの住民は敵対。学校でも、両者はいがみあう。ところが夏休み中の林間学校でとんでもない災害に遭って、子供たちはどうする？

(りんどう)

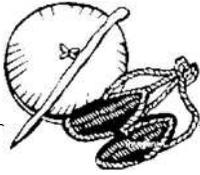
## 『 銀杏手ならい 』

西條奈加／著  
祥伝社文庫 2020

時代小説であり人情小説でもある。江戸時代のわが国は当時の世界では屈指の教育大国であり、幕末に訪れた諸外国の人々は、日本人は支配階級だけではなく多くの庶民が読書を楽しみ、文字を書ける者が少なからずいることに驚いている。

この小説はそんな江戸の庶民の手習い所の話である。主人公は隠居した父親に替わって手習い所「銀杏堂」を継ぐことになった萌。女の新米先生を侮る悪童に振り回されながらも、真っすぐに子どもたちと向き合いながら「人」として「師」として成長していく。

作者が創造する登場人物たちはそれぞれに個性的で魅力的であり、後味の良い読後感が残る小説である、この「銀杏堂手ならい」はシリーズものとしてもっと読みたいという気持ちにさせる。(昼行燈)



## 『流人道中記（上・下）』

浅田次郎／著 中公文庫 2023

浅田次郎は小説を面白く創る人だ。旗本で新番組士でもある青山玄蕃は、罪を犯し切腹を命ぜられたがなんと「痛いからいやだ」と断ったのである。しかし、格式の高い直参旗本を打ち首にするわけにもいかず、奉行たちが協議した結果松前藩へ永蟄居お預けと決まった。江戸から津軽の三厩まで罪人を押送するのは、貧乏同心の家に生まれ育ったが、学問も剣術もできて運よく与力の家に婿養子に入った石川乙次郎 19 歳。見習い与力である。

この二人が津軽の三厩までおよそ一か月の旅をするのだが、罪人のはずの青山玄蕃は教養も貫禄もあり、若い石川乙次郎を従えた主従に見えてしまう。道中さまざまなことに出会い、さまざまな人々とかかわるたびに青山玄蕃の人となりの魅力が発揮する。この男は本当に罪人なのか。

(M・S)

## 『ハンチバック』

市川沙央著  
文藝春秋 2023年

著者市川沙央は、先天性の難病の筋疾患を抱え人工呼吸器と電動車椅子を使用しなければ生きていけない。その日常の中で書いた小説「ハンチバック」が高い評価を受け、昨年第 169 回芥川賞を受賞。難病の主人公の視点で、健常者優位の現代社会に対する批判を多々書き評判です。 (N 生)

## 『同姓同名』



下村 敦史 / 著  
幻冬舎 2022

2023 年、中学生ビブリオバトルで1位になった小説。社会派ミステリーといえる。SNS（ツイート）の世界の危険性を存分に炙り出している。ニセ情報は雪だるま式に大きくなっていき、その中で人は、他人を中傷することに快感を得、自身は偽善者となる。

ある猟奇殺人者と同姓同名というだけでネット上に晒された 10 人。社会的差別を受け、人生をも危うくされるという多大な被害にあう。10 人は名誉回復のために会を立ち上げ動きだし、自らの手で犯人を捜していく。ストーリーは二転三転し、読者の推理を突き放す。少し無理な展開は否めないが、それだけに複雑になっていく面白味がある。著者はこの年 41 歳。若い。ミステリーも時代と共に変わっていくと改めて思わせられた。  
( M. K )



## 『晴天の迷いクジラ』

窪 美澄 / 著 新潮社 2012

とことん追い込まれたと思ったときに、  
「なーんも我慢することはないよ。あんたのやりたいことすればいい。あんたはそのために生まれてきたんだよ。」

「薬のんで入院したっていい。どんなことになっても、そこにいてくれたらそれで、それだけでいいんだよ。」

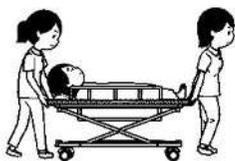
という言葉に出会えたら、自分の人生を思いなおそうという気持ちが生まれてくることもあるんじゃないかな、と思いました。

( ヤブカンゾウ )

## 『 哲学の教科書 』

中島義道／著 講談社 2009

多くの人が哲学という言葉を目にしたことがあると思いますが、では哲学とは何かと問われて即答できる人は少ないと思います。また、多くの人にとって哲学といわれてイメージするのは有名な哲学者の名前や著作あたり、何か小難でいいことをやっているものだと思います。わたしもこれまではそんなイメージを持っていました。本書はそんなイメージを変えてくれる一冊です。本書を最後まで読んでも哲学の主たる命題がわかるわけではありません。それでも哲学という学問がどういった学問なのか、哲学者と呼ばれる人々がどういった人たちなのか、これまで曖昧だった哲学という言葉が今までよりもはっきりとイメージできるようになるとおもいます。哲学に興味がある方々はご一読してみてはいかがでしょうか。 (M. T)



## 『 機械仕掛けの太陽 』

知念実希人／著 文芸春秋 2022

2020年初頭から2022年までの新型コロナウイルスとの戦いを、大学病院に勤める専門医、20代の看護師、長年地域医療に貢献してきた町医者の3人の視点で描いた物語です。未知のウィルスの脅威や医療現場の凄惨さが現役医師ならではの視点で書かれており、実査に起こったことも書かれているので、当時を思い出しながら読みました。あの頃は自粛自粛で会いたい人にも会えず、行きたいところにも行けず辛かったけれど、医療関係者はこんなに大変な状況の中闘ってくれていたんだなと頭が下がりました。ありがとうございます。 (M. O)

# 『映画を早送りで観る人たち』

ファスト映画・ネタバレー コンテンツ消費の現在形

福田豊史/著 光文社新書 2022

「タイパ」とか「コスパ」とかという言葉が今や日常的に使われている消費社会の実態を、いち早く 2022 年 4 月に描き出した意欲的な一冊です。(N 生)



## 『かたばみ』

木内 昇/著 角川書店 2023

『かたばみ』は、2022 年いくつかの新聞に連載されて話題になった作品です。連載開始を前に、今作へ懸ける思いを木内さんが寄稿した文章があって、それを紹介します。作品は著者の気持ちを如実に表現していて、爽やかで感動的な読後感でした……(やませみ)

新しくはじまる連載小説『かたばみ』は、戦時中から高度経済成長期に向かう時代を舞台にしています。槍(やり)投げ競技の元有望選手にして、引退後に教師となった山岡梯子なる女性とその家族が、困難な時代を生き抜く軌跡を描いていくつもりです。しかし梯子たちはきっと、自分らしい足取りで未来を切り拓(ひら)いていくのではないかと期待しているのです。梯子を取り巻く一癖も二癖もある人々や、戦中と戦後で百八十度様相を変える教育現場、その変容する社会の中で、彼らがどんなことを感じ、行動し、現実と向き合っていくのか、見守っていただければうれしいです。本作は、ままたらなさを跳ね返す人間の力強さや明るさが満ちたものになるような予感がしています。(きうち・のぼり=作家)

### 編集後記

この冊子の発行直前、2024年1月1日、能登半島地震が発生し、甚大な被害がもたらされています。被災地の皆様に心からお見舞いを申し上げます。

コロナが少しずつ下火になってきて、図書館ボランティアの活動もだんだん自由度が増してきたようです。“おすすめの本”の作製も、会員の皆さんの力強い協力に加えて、今年度は図書館職員の方々の参加もあって内容も豊富になり充実したのではないかと考えています。また職員の方の担当で設置される展示コーナーでは、今回は何か工夫（ポップなど？）があるようで、期待されます。またいつものように東浦和支部の応援団、南支部根本様、元会員吉田様から応援原稿を頂きました。ありがとうございます。（T記）

## おすすめの本を展示しています

図書館入り口左側 展示コーナー

令和6年1月23日（火）～2月13日（火）

◇展示資料は貸出しが可能です。お手にとってご覧ください。

編集・発行

2024年1月15日

さいたま市図書館友の会東浦和支部